

# 『教育心理学』における授業前課題導入の試み

鳥 丸 佐知子

心理学関連の授業において、講義科目としての『教育心理学』は、保育の仕事と結びつきにくいと感じている学生が多い。この敬遠されがちな講義科目『教育心理学』が学生にとって身近なものとなり、同時に授業をよりスムーズにスタートさせるにはどうすればよいのか、数年に渡り、さまざまな試行錯誤を繰り返してきた。本論ではその一連の試みの中から「授業前課題」を用いた実践例の紹介と、今後に向けての課題について報告する。

キーワード：授業前課題、黙想、百マス計算、絵本タイム、集中

## I. 問題と目的

保育士養成校の本学で、現在筆者が担当している心理学関連の講義科目の中で『発達心理学』が「自らの発達とも重ねやすい」との理由から、身近なものとして学生に受け入れられやすいのに対し、『教育心理学』は「保育者になるのになぜ必要なのか」という学生の素朴な疑問に代表されるように、保育の仕事と結びつきにくいと感じている学生が多い。『心理学』という言葉の響きから、授業の詳細な内容を確認することなく、いわば食わず嫌いの状態で、分かりにくいと決めつけている学生もいる。

筆者は以前、いくつかの4年生大学で『教育心理学』関連の授業を担当した経験があった。しかし講義名は類似でも「保育者」養成の本学の科目とは（当然のことではあるが）そこで伝えるべき内容や、受講生側が講義に求めるものに大きな違いがあった。初めて本学でこの関係の授業を担当したとき、自らの講義が明らかに彼女らとかみ合っていないこと、独りよがりの講義になっていることを、講義に対する彼女ら

の反応から、しみじみ感じたのを今でも覚えている。また内容とは無関係に、講義形式の授業はあまり好きではないという傾向は、本学の学生全体を通して共通するテーマであるように思う。基本は現場の実践と関連付けにくいとの理由であることが多いが、演習科目や各種実習に比べると、学生に敬遠される傾向にある。

確かにこれら講義科目での学びは、実践に結びつくものではない場合もある。しかし将来、保育の本質を知るものとして、身についた知識となり、現場で生かせるものにできたなら、自らの応用も可能になり、その効果は絶大なものとなる。そのためにも、まず身近なものになってほしいというのがこの数年の筆者の思いであり課題でもある。さらに授業をスムーズにスタートさせるために、この数年様々な試行錯誤を繰り返してきた。

今回本稿で取り上げる『教育心理学』の授業は、筆者自身、未だ自分なりに満足する方法が見いだせず、悩み続けている担当科目のひとつである。本科目は資格取得のためには必修なので、「出席」のためだけに、仕方なく授業に参加している学生もいるように思う。また、学生

側が本授業に求めるものや期待する内容と、教員である筆者が伝えたい内容がかみ合わないところもあるように思う。授業中の私語も、年を追うごとに増えてきているように感じる。これらの科目が、何限に開講されているかによっても学生の授業態度に違いが見られるからである。例えば1限に開講される場合、学生側がまだ十分に目が覚めておらず、ぼんやりとして席に着き、何となく90分座って去っていくという場合もあるし、頻繁に遅刻を繰り返す学生もいる。それ以外の時間帯の場合は、前の授業との関係から、教室間の移動時間等の関係で決められた時間に授業をスタートさせられない、また前の授業や休み時間の気分を引きずったまま、授業に突入する学生も多い。さらに大型講義である場合、授業担当者である筆者自身が、授業中の学生の細かい様子までは、十分に把握できないこともある。

上述のように、今後改善すべき問題は山積みなのかもしれないが、その中からまず「①スムーズに授業を開始する」「②授業に（可能な限り）集中させる」「③保育現場との関連性の認識」の3つにポイントを絞り、この数年様々な取り組みを行ってきた。その中で今回取り上げるのは「①スムーズに授業を開始する」というテーマの関連である。つまり講義をいかに「静かに」スタートさせるかという試みの一つで、さらにその試みを通して、可能ならばその後の「②授業に集中させる」準備状態を作り出せれば、さらに効果的であるとも考えた。

そこでこの「静かに」授業をスタートさせるための試みとして筆者が数年間試みてきたことに関して、まず2008年度の具体的な取り組みについて記述してみたい。2008年度、ここではまず、授業の開始時間から5～10分で修了できる「授業前課題」を用意するという試みから始め

てみた。この課題時間を用意することで、様々な状態で教室にやってくる学生の気分状態、ある程度、共通のものに変えられないかと思ったのがこの課題に取り組んだ理由である。また自らの身体の一部を必ず意識して使わなければならない課題をすることで、これから授業を受ける「自分」自身に注意を向けられるのではないかと考えた。

この年はどんな課題が最も効果的なのか、「授業前課題」を導入することで、本当に効果があるのか等もまったく未知数であったので、筆者なりに、効果があるのではないかと考えたいいくつかの課題の中から、毎回異なる課題を用意した。例として、斎藤メソッドの原点でもある呼吸法の紹介（2003）、首回しなどの軽い体操、百マス計算、記憶課題、カルタ作り（田中2008）、概念地図法（鳥丸2009a）、物語作成（田中2008）などである。これらの課題は、フィンランド・メソッド関連の本などを参考にしたものもある。また基本構成として、呼吸法や軽い体操と百マス計算などの課題は交互に実施した。その結果、いずれの課題も次の授業への切り替えや、授業中に集中できる準備状態を整えるのにはそれなりの効果はあるように感じた。最終講義日にこれら「授業前課題」の中で特に効果的だったと感じたものについて、受講生対象に簡単なアンケートを実施したが、その中でも（課題をすることで）「集中出来た」という理由で「百マス計算」は予想以上の好評価であった。呼吸法や軽い体操なども「頭がすっきりする」という類の感想が多く寄せられた。

2008年度の学生の感想では、「授業前課題」をすることの意義はあるとの回答だったが、それが「『教育心理学』の講義内容と直接結びつくものではないことに疑問を感じる」という意見もあった。次の授業への切り替えや、授業中

に集中できる準備状態を整えるのにはそれなりの効果はあるのではないかという手ごたえを感じつつ、この年度の試みは終了した。

2008年度の実践をもとに、2009年度改良を加えた部分、また全学的な試みになりつつある「黙想」、および2009年度初めて実施し、結果的に大好評だった「絵本タイム」などが本論文の中心的内容となる。しかし学生に好評であることと、授業内容の充実とは必ずしも一致するものではなく、その意味で、新たな課題も見出された。本論文では、2009年度に毎回実施した「黙想」「百マス計算」「絵本タイム」の試みについて、学生対象のアンケートの結果なども交えながら、その効果と今後に向けてのあり方について検討してみたい。

## Ⅱ. 方 法

調査方法は最終講義日の質問紙による調査であるが、まず3種類の「授業前課題」の内容について簡単に説明する。

### <黙想>

授業の開始冒頭、30秒間の「黙想」を行った。休み時間中、おしゃべりに花が咲いていた学生や、飲食をしていた学生も、短い時間ではあるが、本課題を一つの区切りとして、静寂の時間を味わい、自らの身体感覚にも注意を向け、心落ち着かせ、静かに授業を受ける準備状態を作る時間となった。

### <百マス計算>

専用の用紙を筆者側で作成し、授業前に毎回配布した。数字は各個人で、ランダムに1桁の数字を記入してもらい2回実施した。足し算を2回する学生が主だったが、中には足し算と掛

け算を試みる学生もいた。本年度は所要時間については各自ではからせた。

### <絵本タイム>

2009年度はクラス単位の授業（50名弱）であったので、全体を4～5名の10グループに分け、すべてのグループが1回担当する。自らの担当の日には、最大10分間以内で終了する内容のプログラムを作り、クラスメイトの前で実演する。プログラム内容は、メインに絵本（紙芝居などでも可）を置き、その前後に、上演する絵本のテーマや、その季節にあった導入（手遊びや子どもへの語りかけ）を組み合わせ、授業開始へとつなげるというもの。実際に何歳児を対象に考えたものなのか、対象年齢を明確にすること。実際の保育場面を想定して計画することなどを事前に教示した。

### 1. 調査対象

前期『教育心理学』を受講した児童教育学科幼児教育専攻の2回生女子 149名

### 2. 実施時期

本講義最終日の授業開始前の時間を用いて、質問紙による調査を実施した。所要時間は約10分であった。

### 3. 調査内容

本年度前期に授業前課題として導入した「黙想」「百マス計算」「絵本タイム」の3つの課題について役に立ったか否かの5件法による質問紙、およびなぜそう評価したのかの自由記述。

### Ⅲ. 結 果

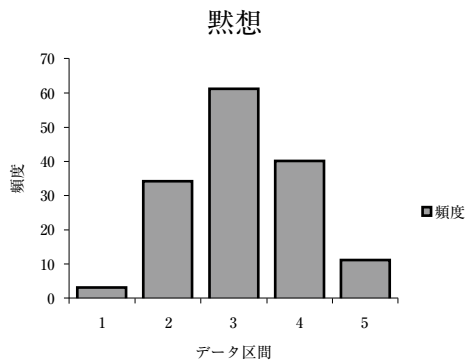


Fig. 1 黙想

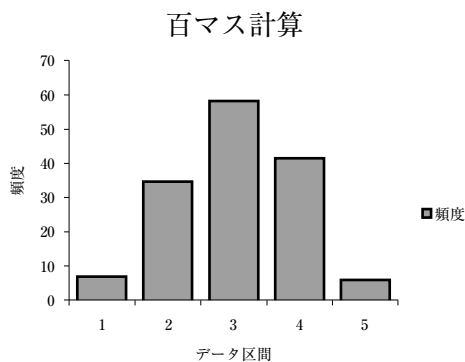


Fig. 2 百マス計算

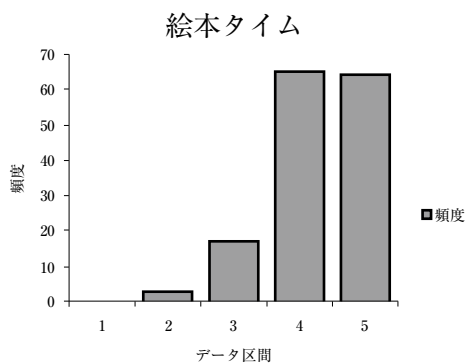


Fig. 3 絵本タイム

最初に3種類の「授業前課題」について、どの程度役立ったとかを5件法で尋ねた結果についてまとめる。Fig. 1からFig. 3は5件法による質問の度数分布表を示したものであ

る。各課題の平均値と標準偏差値は①黙想が ( $M=3.15$ ,  $SD=0.93$ )、②百マス計算が ( $M=3.00$ ,  $SD=0.93$ )、③絵本タイムが ( $M=4.28$ ,  $SD=0.74$ ) であった。「黙想」と「百マス計算」がほぼ正規分布に近い分布になっているのに対し、「絵本タイム」については、将来役に立つものとして、大変有効であったと答えているのが分かる。

Table 1 テキストマイニングによる抽出結果

黙想	頻度	百マス計算	頻度	絵本タイム	頻度
思う	39	なる	42	いろいろ	35
落ち着く	35	する	38	する	19
する	30	思う	33	楽しい	21
なる	26	頭	25	良い	22
授業	26	計算	22	経験	13
良かった	21	速い	15	ある	11
黙想	21	できる	14	子ども	10
集中	20	楽しかった	14	グループ	14
ない	19	ない	13	実習	11
できる	16	百マス計算	12	機会	13
静か	16	ある	11	聞く	10
いる	15	めんどくさい	11	手遊び	26
意味	15	毎回	10	絵本	45
ある	12	集中	10	前	25
人	11	いる	9	なる	44
眠い	11	分かる	9	みんな	26
心	10	タイム	9	見る	28
気持ち	9	良い	9	思う	38
いう	8	初め	9	読む	22
雰囲気	8	少し	8	発表	26
		いい	8	できる	19
		意味	8	良かった	16
		だんだん	8	知る	19

次にTable 1は各課題について、なぜそのように評価したかの自由記述文について、SPSS Text Analysis for Surveysを用いてテキスト分析を実施した際、出現頻度上位の語の一覧を示したものである。なお最初の抽出結果を参照にしながら、再度全入力文を見直した結果、同じ内容を示すと思われる単語についてはひとつの表現にまとめる等の微調整を行っている。Fig. 4からFig. 6まではそれらを用いて主成分分析を行った際の、第1主成分を横軸、第2主成分を縦軸に、成分負荷に従って布置図を作成したものである。それぞれについて、具体的な記述例も示しながら順次解釈していく。

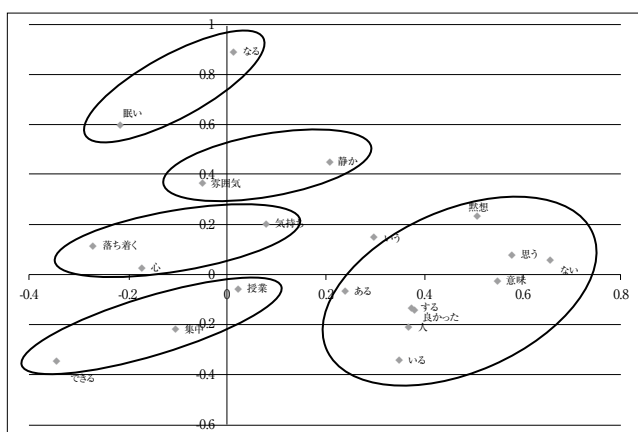


Fig. 4 黙想

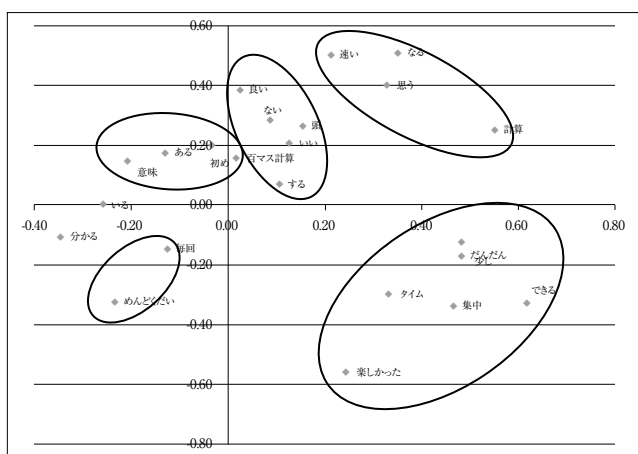


Fig. 5 百マス計算

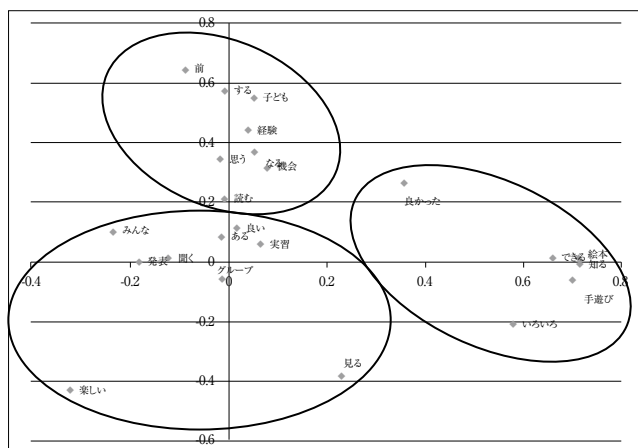


Fig. 6 絵本タイム

### ①黙想

自由記述文は全部で127文、第1主成分と第2主成分の全体への寄与率は21.67%であった。Fig. 4を見ると、いくつかの塊が見出されるのがわかる。まず左下の「集中」を中心とする部分は（黙想をすることで）「授業に集中できるようになり」「気持ち（心）が落ち着く、落ち着いた気持ちになる」と解釈できそうである。しかし（特に低い評価をしたものに見られたが）「静かな雰囲気」になることは、「眠くなる」側面も持っているとも言える。また右側の「意味」を中心とする塊では両義的な解釈が可能で「（まじめにしていない人がいたなどの理由で？）意味がないと思う」と答えるものがある一方で「意味がある」「（黙想を）して（する）よかった」と答えるものもいることが分かる。

次に代表的な具体的自由記述例を示す。なお（ ）内の数字は5件法で何点と評価したかの値を示している。

#### \*具体例

- ・ 講義を受ける前に、落ち着いた気持ちになりました（5）。
- ・ 授業に入る前に黙想を行うことで、昼休み時間から授業に入るための心の切り替えになるし、全員が静かにすることで、落ち着いた雰囲気から授業が始まっていくし、黙想を取り入れる方が、先生も授業がしやすかったのではないと思う（5）。
- ・ 授業前に落ち着くことで授業に集中することができました（5）。
- ・ 授業を行う前にやることで、すごく授業に集中できました。そして心を落ち着けられたので、良かったです（5）。
- ・ 授業の初めにして落ち着くことが出来た。落ち着くと授業も聞き取りやすかったです（4）。
- ・ 集中できる雰囲気になるから。でも眠たくなったりもする（4）。
- ・ 「授業が始まる」という緊張感が少しはできたと思う（4）。
- ・ 集中できる雰囲気になる（3）。
- ・ 初めに授業に集中するための導入としては良いと思うが、黙想の目的はいまいち理解できなかった（3）。
- ・ あまり意味がないのではないと思う。ただ黙想で静かになるのは良いと思う（2）。

### ②百マス計算

次に「百マス計算」であるが、自由記述文は全部で124文、第1主成分と第2主成分の全体への寄与率は18.24%であった。今回の3つのデータの中では、全体に対する寄与率はここが一番低い。Fig. 5を見ると、大きく5つの塊があるのが分かる。具体例も参考にしながら解釈すると「計算が速くなると思う」「タイムもだんだん（少しずつ）あがって楽しかったし（授業にも？）集中できた」また「（通常こういうことをする機会が）ないので百マス計算をすることはいい頭の体操になって良かった」「初めは意味があった」が「毎回するのはめんどくさい」という学生もいたと解釈した。

#### \*具体例

- ・ やればやるほど計算が速くなっていくのが分かって嬉しかった。他の授業で計算をやる機会が全くないのでよかった（5）。
- ・ いい勉強になった。だんだんとタイムが速くなるのも実感し嬉しかった（5）。
- ・ 集中して取り組むことが出来た。だんだんかかる時間が少なくなってくると嬉しかった。
- ・ 頭を使う機会が減っているので、百マス計算で鍛えられるのはよかったです（5）。

- ・だんだんタイムが上がって楽しかったし、集中力も少しできた気がする（４）。
- ・久々に計算するので、脳が働いた感じがして新鮮だった（４）。
- ・授業前にぐっと集中力をつけることが出来たと思います（４）。
- ・空き時間でボーッとした頭が、百マス計算をやることでキリッとなったから（４）。
- ・集中して、授業に取り組むことが出来た（４）。
- ・頭を動かす準備体操のような感じでした。ですが、計算はあまり好きでないので、辛かったです（３）。

### ③絵本タイム

最後に「絵本タイム」であるが、自由記述文は全部で135文、第1主成分と第2主成分の全体への寄与率は20.43%であった。Fig. 6を見ると「いろいろな絵本や手遊びを知ることができて良かった」「（クラスメイトの）前で読むための経験になったと思う」「みんなの発表を聞くことでグループごとの工夫があるのが良いと思ったし見ていて楽しかった。実習でも使えそうだった」と解釈してみた。

#### \*具体例

- ・自分が知らない絵本を沢山知ることが出来て良い機会となりました。また発表をする中でクラスの子の上手な工夫を見て学ぶことが出来良かったです（５）。
- ・実習など就職して使えるような絵本がたくさん見つかり、私的にはすごくいい時間になりました。導入の仕方なども分かったりして良かったです。私も実際にやってみて、子どもの前ですのと違い笑ってしまったけど、いい経験になったし、反省点も見つかったので

良かったです（５）。

- ・読み手の気持ちも、聴き手の気持ちも知れてとても良かった。楽しかった（５）。
- ・絵本タイムをすることによって、みんなの感想も聞けて改善点も分かり、やる前より成長できた（５）。
- ・グループごとの工夫や方法や、選ぶ絵本が異なり、毎回楽しみでした。見ることも、自分が発表することも勉強になりました（５）。
- ・自分たちで絵本タイムの流れを考えることが出来、他のグループの発表を見て、次の実習などで役に立つと思った（５）。
- ・友達の発表を見て指導の参考にできたり、ここはこうしたほうが良いなど考えることが出来た（５）。
- ・みんなで絵本を読み合うことで、技術の向上につながりました。また、みんなからの感想が寄せられたレジュメのおかげで、客観的な評価が得られました（５）。
- ・他の授業ではもう機会がないので（来年度も）やり続けてほしいと思います。実習前と実習後では大幅に絵本の読み方が上達しているので、聴いていても楽しかった。
- ・様々な絵本や手遊び、導入の仕方など、クラスのみんなの絵本タイムを見て知ることが出来たから。そして自分が前に立つことによって練習できた（５）。

ところで今回の試みでは、「授業前課題」とその後の「集中」度との関連についても関心があった。そこで今回さらに、出現頻度上位語の中に「集中」という言葉のあった「黙想」と「百マス計算」について、対応分析を実施してみた。Fig. 7とFig. 8がその結果である。

これは、同じ文章の中で、同時に出現する回数が高い（複数の人が同時に同じ言葉を同じ文

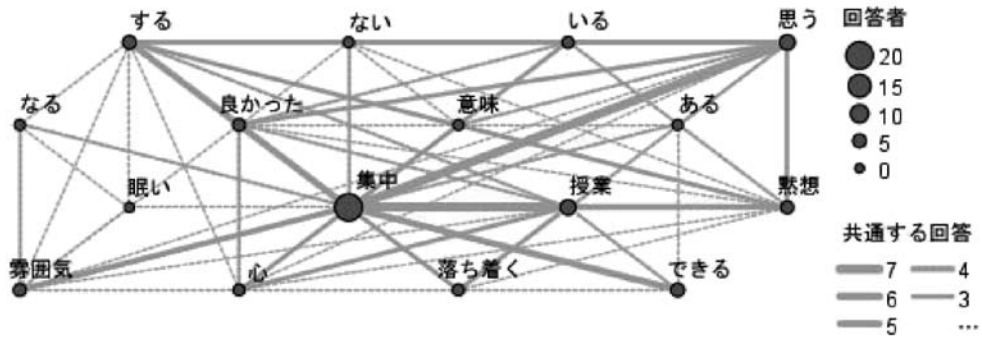


Fig. 7 黙想と集中の関連について

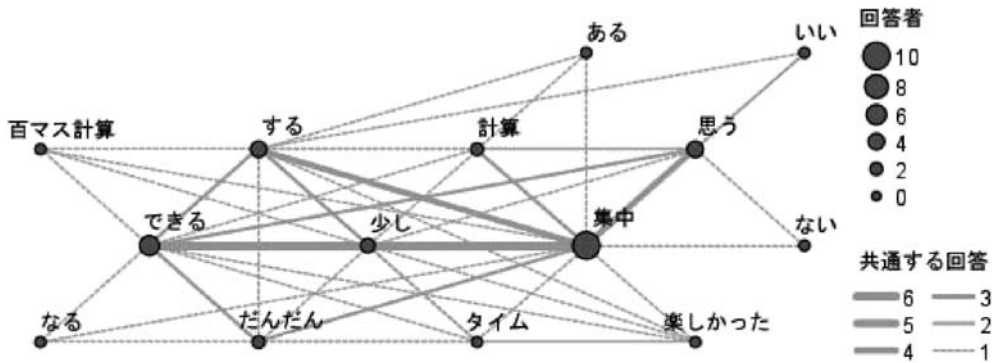


Fig. 8 百マス計算と集中の関連について

章の中で使用している) ほど太い線で結ばれている事を示すものだが、2つの図を見比べてみると、同時に出現する言葉が異なっているのが分かる。詳細を見ると、「黙想」と「集中」の関連を示すFig. 7では、「授業」「落ち着く」「良かった」「思う」「できる」などの言葉との関連が読み取れ、「黙想」することが気持ちを落ち着かせて授業に集中するのに役に立ったと感じていたことがうかがえる。

一方「百マス計算」との関連を示したFig. 8では、「少し」「できる」「する」「思う」「計算」などの言葉との関連性が読み取れ、授業という

よりは、自分自身の頭が、この計算をすることで少しずつ活性化し、集中できるようになっていくように思えることが楽しかったと感じているという結果になった。その意味で「授業」との関連から考えると、彼女らは「黙想」の方が「授業」に集中できるツールと考えていたことが分かる。

#### IV. 考 察

本研究の目的は、現在教職関連の講義科目として開講されている『教育心理学』をより身近



なものとして感じてもらうこと。また、将来保育者を目指す彼女らに、この科目を学ぶことの意義や重要性を知ってもらうためにはどうすればよいか。さらに、今よりスムーズに授業を開始するにはどうすればよいのか。本授業担当者である筆者自身が、数年に渡って試行錯誤してきた中の「授業前課題」導入実践例についてその効果や問題点について検討することであった。授業最終日に実施したアンケート結果を中心に、そこから見えてきた彼女らの思い、また今後に向けてのあり方等について、順次まとめていきたいと思う。

2008年度から試み始めた「授業前課題」であるが、前年度と大きく異なるのは、毎回「黙想」「百マス計算」「絵本タイム」の3つの同じ課題を実施したということである。このことで最初は戸惑いがちであった彼女らも、3回目の授業から、スムーズに流れに乗って課題を行えるようになるという効果があった。また以前は授業開始時に私語や飲食をやめさせることに、大きなエネルギーを注いでいたことを考えると、その点においても、この試みは有効に働いたといえるであろう。

それではこれらの課題をすることは、学生側にとってどういうものとしてとらえられていたのだろうか。

まず「黙想」についてまとめる。これについては5件法による調査では、ほぼ正規分布に近い形になっていることから分かるように賛否両論であったといえる。この課題を行うことで落ち着いた気分になれ、授業にも集中できるという意見がある一方で、(授業の開講時間にもよると思うが)やることの意味を問うもの、眠くなるというような意見も見られた。しかし「集中」との対応分析からも分かるように、この課題は「授業に集中する」ための1つの手段とし

て、学生側に感じさせるものであった可能性も大きい。全員が自然に課題遂行できるような環境づくりも必要であると感じられた課題でもあった。

次に「百マス計算」についてまとめる。この課題も「黙想」と同様に、5件法による調査では、ほぼ正規分布に近い形になっている。この課題は、いくつかの小学校などでも、すでに取り入れられている有名な課題でもあるが、筆者の中には脳の活性化というような問題ではなく、もっと基本的な問題、つまり計算そのものに触れる機会が非常に少なくなっている彼女らに、再度、基礎学力の復習をしてもらうこと、また1週間に1回程度の試みであっても、定期的に実行することで、自らのタイムが上がっていくことを実感してもらうことに重みが置かれていた。実際3回目くらいからタイムが上がる学生は多く、そのことが自己効力感や達成感につながっていた学生もみられた。この課題については、同じ集中でも、授業に直接結びつくものではなく、自らの頭が集中しやすい状態になると感じている学生が多かったようである。

最後に「絵本タイム」についてまとめる。今回実施した3つの課題の中で、一番好評だったものである。この課題については、筆者自身のさまざまな思い入れもあって試みたものである。いくつか例を挙げると、まず本学の学生は、1回生の時に「絵本ノート」という課題がある。この課題はかなりのエネルギーを要するものなので、その課題を終えた時点で、かなりの数の絵本の内容を知っているはずである。また、「絵本」は保育の現場において、様々な側面から利用可能な素晴らしい素材であることを、長年の読み聞かせのボランティア活動からも、筆者自身が一番感じていること。また数年前の実習訪問時に、某幼稚園の園長先生から、本学の学生

の「絵本」に対する認識の甘さについて、お叱りを受けた経験。これらをあわせ、講義中の短い時間で、学生に有効な「絵本」の使用法を学ばせる機会は作れないものかと考えた結果生まれたのがこの課題であった。

この課題については、役に立ったと答えた学生は非常に多かった。自由記述からも、学生にとって現場で生かせるものとして認識されたことがこの結果を生む要因になったのは理解できた。(今回は詳細については省略するが) 学生も筆者もこの課題を意味あるものとして位置づけ、持続できるようにするために、かなりの時間を割いてきたし、課題のみの内容を考えるなら、それなりに効果的なものだったのではないかと感じている。ただ、一部学生の感想にもあったように(これは他の授業前課題でもいえることだが) この課題と授業との関連性がつかみにくいというのは、筆者自身も感じるところであった。改めて言うまでもなく、授業科目名は『教育心理学』である。授業をスムーズにスタートさせること、また授業に集中できる可能性があったとしても、これら3つの課題を終えるのに、例えば「絵本タイム」の準備時間等で、筆者の予想以上の時間を要することもあった。当然授業のために充てられる時間は減少することになる。また例えば「絵本タイム」だけにエネルギーを注いで、その後は面白くなさそうにしている学生も複数見受けられた。

2年間の取り組みを通じて「授業前課題」にはそれなりの効果が見られそうだという手ごたえは感じている。この課題をすることで削られ

た授業時間を、準備学習と呼ばれるような授業外の学習でいかに補うかは一つの課題であろう。また講義形式の授業の中で、どこまで双方向性のある授業の展開が可能になるのかという問題もある。さらに大人数の受講生の場合、現実問題として、一人の教員の力でどこまで手がかけられるかということもある。TAに代わる人材をいかにして確保するのか。対面でのコミュニケーションが苦手な学生が増えていく中で、例えば「バズ学習」形式の導入なども有効な手段の一つにはなるかもしれない。来年度より筆者が担当する心理学関係の科目の一方は演習形式になる予定である。それも考慮しながら、教師にも学生にも過度の負担がかからない形で、より有効な学習方法を探っていきたい。

#### 参考文献

- 北川達夫著(2005)図解 フィンランド・メソッド入門  
経済界
- 斎藤孝(2003)呼吸法入門 角川書店
- 田中博之(2008)フィンランド・メソッドの学力革命  
— その秘訣を授業に生かす30の方法 明治図書
- 鳥丸佐知子(2009a)保育士養成校での「教育心理学」  
における試み 日本保育学会第62回大会発表論文集  
246.
- 鳥丸佐知子(2009b)『教育心理学』における授業前課題  
導入の試み ～絵本タイムを中心に～ 関西心理学  
会第121回大会発表論文集 40.
- 鳥丸佐知子・新島陽子(2010)京都文教短期大学＜FD  
活動の経緯と課題＞ 2009年度 第15回FDフォーラ  
ム報告集